北欧先住民 サーミ族の実験
～ 遊牧国家と定住国家について考える ～

小松 啓一郎（こまつ けいいちろう） コマツ・リサーチ・アンド・アドバイザリー 代表

- 政府系金融機関（当時）商工中金に10年間勤務。中小企業向け金融業務（東京）および為替トレーダー（米国ニューヨーク・ウォール街）等に従事。
- 1990年英国オックスフォード大学・政治経済学部に学士入学。
- '91年同大学大学院進級。同大学・東洋学研究所「日本経済」担当非常勤講師。
- '94年同大学大学院にてD.Phil.（博士号）取得（政治学・国際関係論）。世界銀行・海外民間投資促進コンサルタント、英国通商産業省・上級貿易アドバイザー（ジェトロ長期専門家スキームにより派遣）、英国海外貿易総省・上級貿易アドバイザー（同）
- 2008年マダガスカル共和国大統領・特別顧問に就任。マダガスカルでクーデター発生後の主要業務は経済開発から正当政権復帰のための外交活動にシフト。5年ぶりの同国民主選挙によって2014年に新共和国大統領が誕生したため業務内容について協議中。
- その他、FGPE（地球環境平和財団）欧州・中東・アフリカ代表。英国王立国際問題研究所会員、英国国際戦略研究所会員、オックスフォード大学国際問題研究センター会員、ケンブリッジ大学日英協会会員、成城大学経済研究所研究員、米国カータス社やプルーデンシャル社、ベルリッツ社等で異文化間ビジネス研修教官を兼務。2005年3月、在英Komatsu Research & Advisory（KRA）設立。

「遊牧国家」と「領域帝国」の関係

遊牧国家といえば、ジンギスカンが建国した13世紀のモンゴル帝国などを思い浮かべる読者も多いであろう。当時は中国でも農耕主体の定住民族だった漢民族がつくる「文明的」な領域帝国・中国に対し、「野蛮で暴力的」で軍事力だけが強い北方の遊牧騎馬民族の対立という国際社会の構造が何千年も続いていたとされる。

文字のない時代のことはともかくとして、漢字が登場してからの時代に限っても、中国側の秦帝国や漢帝国に対し、北方の匈奴帝国や鮮卑帝国、柔然帝国等の対立関係が続いていた。しかし、そのような「農耕定住国家」対「遊牧帝国」の戦いは、遅くとも17世紀ぐらいまでに農耕定住国家による「文明的」な完勝で遊牧国家的社会が消滅し、その後は定住領域国家のみが存在する世界になったというのが学校で習った歴史だった。

特に、西洋列強による15世紀以降の「地理上の発見」で圧倒的な高度文明と軍事力を持つ国々が文化の「遅れていた」アジアやアフリカ、中南米、太平洋地域を征服していき、狩猟採集的な生活や遊牧国家的な社会が急速に消えていったことになっている。

しかし、本当にそうだったのだろうか。

筆者は英国在住という事情から比較的「近場」の欧州大陸諸国から中東、アフリカ等に出張する機会も多い。そして、その中東やアフリカの奥地では今も遊牧生活や狩猟・採集生活を続ける人々にも出会ってきた。少なくとも、遊牧社会に関しては過去数世紀間にわたって衰退していたように思われてきたものの、実際には一定の安定感を持って存続し続け、ごく最近になって国際社会に再登場しつつあるような印象を受ける。

その場合、かつての数千年間もの対立関係に見られるように、土地の占有を基盤とする定住領域国家に対し、土地にはこだわらずに居住地域を移動することによって生活手段を確保しながら特定の人口を統治する人頭支配の遊牧国家の利害は対立しがちとなる。遊牧国家は定住領域国家の「領土」を認識せずに侵入してくる傾向があり、土地をめぐって定住民族と遊牧民族の間で紛争が起こるのは必然的な帰結ともいえる。したがって、現在のように、ただでさえ定住領域国家間の領土紛争が絶えない中、さらに世界のあちこちで遊牧国家のようなものが復活すれば、数世紀前まで頻繁に見られた形の紛争が再燃する懸念も十分ある。

アフリカサハラ砂漠のトゥアレグ族にみる対立

一つの実例を挙げよう。北アフリカに広がるサハラ砂漠は実に10か国の領土にまたがっている(モロッコ軍占領下の西サハラが独立国と数えられれば11か国)。砂漠の環境に特化した生活スタイルを持つトゥアレグ族は、いくつかの異なる言語の部族に分かれているものの、これら10か国以上の国々の国境を越えて生活している点で共通している。そのような社会に定住領域国家の概念を導入して全ての国境を管理したり、国境越えの度にいちいちパスポートをチェックしたりするような国境管理は不可能としか言いようが無い。しかし、それでも場当たり的で断続的な管理が実施されることがあり、トゥアレグ族の越境が困難になり、生活圏も限定されるようになった。

その結果、生活水準の低下と貧困がさらに深刻になっている地域がある。マリ共和国やニジェール共和国の砂漠地帯で軍事行動や拉致・誘拐・テロ行為に走る人々の中にはトゥアレグ族をはじめとする遊牧民族出身者がかなり混じっている。南部のマディンカ族が中心となっているマリ領内の北部で一方的に独立宣

言を発したアザワド国家の主力もトゥアレグ族であり、そこへ後から侵入してイスラム原理主義を導入した過激派勢力アンサル・ディーンもまた別のトゥアレグ族を中心に構成されている。

そのトゥアレグ系武装勢力とマリ国軍の内戦激化を見た旧宗主国フランスが軍事介入し、同じ砂漠の中で国境を接するアルジェリア領内にまで紛争が飛び火していった。武装勢力側に参戦したアラブ系イスラム原理主義勢力の一部がアルジェリア東部イナメナスの郊外で欧州向け天然ガス関連施設を襲撃した 2013 年 1 月の大量人質事件は記憶に新しい。この事件はたちまちアルジェリア国軍との戦闘に発展し、同施設内で働いていた多数の犠牲者の中に日本人 10 人も含まれる悲劇が発生した。その後も同砂漠地帯では現在に至るまで紛争が続いており、類似の人質事件も各地で発生している。

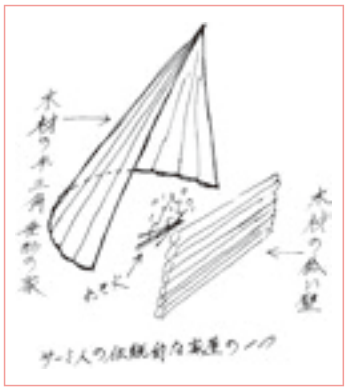
定住国家と遊牧国家の対立要因としては、イデオロギーや思想･信条の違いの他、このように生活様式や価値観の違い、そこから来る貧困問題等も有史以来の課題と言える。しかし、このように今後は異なる文明と価値観が共存しなければならない時代が到来しそうなのであれば、人間の英知によって平和的・協力的な相互関係を築く工夫が必要になる。今回は筆者が繰り返し出かけたことのある北極圏の雪原で試行中の工夫の一例について紹介したい。

サーミ人とその周辺諸国の壮大なる実験

北欧の先住民の文化と生活

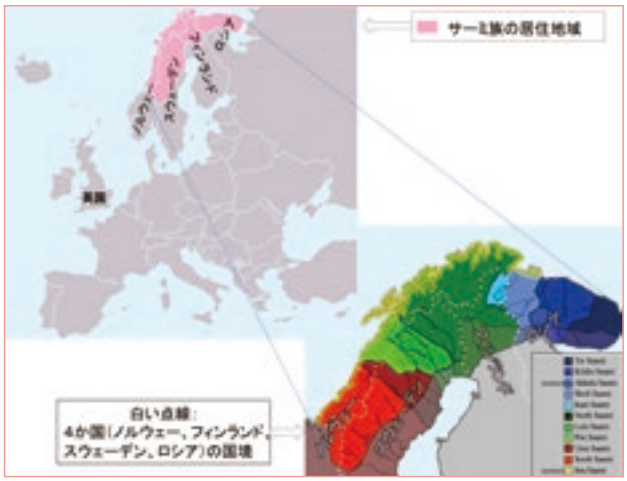
それはノルウェー、スウェーデン、フィンランド、ロシアの 4 か国にまたがって居住する先住遊牧民族サーミ人のケースである。「サーミ人」とは自らを呼ぶ民族名であり、かつては他称として「ラップランドのラップ人」とも呼ばれていた。彼らはトナカイ飼いを生活手段としており、冬に落ちる角を漢方薬のように加工して売り出す主要輸出先には日本も含まれていた。また、トナカイを食肉にするグループもいる。サーミ人には大きく分ければ 7 つの異なる言語があり、トナカイとの付き合い方も大きく分けて 3 種類があって、部族ごとに異なる文化と生活慣習をもつ。サーミ語自体は比較的近隣に住むイヌイット（かつてのエスキモー）系の諸言語や南方に住むスカンジナビア系のゲルマン系言語と比較しても特異な独自言語ともされる。主要言語が7つとは言っても、更にその中に異なるサブ・カルチャーがあり、方言まで入れれば数はもっと増える。多くは北回帰線より北、つまり北限に近い北の果てに住む遊牧系民族であり、筆者がそのテントを訪ねた時もフィンランド人についてさえも「南方から来る人々」と呼ぶのが習慣だと聞かされた。

サーミ人の伝統的な住居は木を素材とした円錐形であるため、一見すると壁の無い三角錐型の縄文式家屋のようにも見える（次図参照）。ただし、サーミ人のある種の住居の場合、「三角錐」とは言っても真ん中で縦にスパッと切ったような半三角錐となっている。縦に切った部分に出入り口があり、そこから 1 メートルぐらいの距離を空けた「玄関前」には木製の壁を作ってある。つまり、北極圏の寒い気候の中で三角錐の正面出入り口の直ぐ外の壁との間で火を炊けば、その暖かい風が三角錐型の居住空間に流れ込んで、暖房の機能を果たすようにできている。これは非常にエネルギー効率の良い構造であり、環境に負担の少ない家屋ともなっている。また、解体や再組立が比較的容易であることも特徴とされる。現在では近代的な住居に入るサーミ人も非常に増えているが、筆者自身はそれでも伝統家屋に住む人々に出合ったことがある。



図：サーミ人の伝統的な住居（筆者による描写）

現在のサーミ人に対する社会的な扱いは、ロシアを除く 3 か国（ノルウェー、スウェーデン、フィンランド）でかなり共通している。実際、遊牧民族と認定されたサーミ人であれば、これら3か国の国境線上のどこでもパスポート無しで自由に往来することが許されている。また、スウェーデンとノルウェーではトナカイを家畜として飼う仕事に就けるのは法的に「サーミ人のみ」とされている。このように、遊牧民族であるサーミ人の生活領域は定住国家たる3か国と重なっている（地図参照）。



地図：各国にまたがるサーミ族の居住地域とサーミ系言語の種類
出所：サーミ文化紹介ホームページ他の資料を基にKRA作成
（上）http://upload.wikimedia.org/wikipedia/en/1/12/Corrected_Sapmi_in_Europe.PNG
（下）http://www.face-music.ch/archelogy/saamidialects.jpg

サーミ語とサーミ人議会

他の民族と同じように、サーミ人にとっても言語の通じない別の部族との関係は必ずしも簡単ではない。筆者が出会った若い夫妻は異なる部族の出身であるため、「同じサーミ語」とは言っても全く通じず、家庭内の共通言語はフィンランド語だと言う。

これらの人々は選挙で選ばれた議員によるサーミ人議会（写真１参照）を持っている。また、議員の中から選出された幹部会が政府の役割を果たしている。このため、議会の議長は大統領（写真２参照）でもある。これらの政治機構はサーミ人たちが暴力的な革命やクーデターを通して「反政府」的な組織を樹立したのではなく、定住領域国家たる周辺３か国の国内法の規定に基づいて設立された議会と行政機構である。サーミ人機構は３つの周辺領域国家の社会的秩序との整合性を前提にしており、現在のところは徴税権や立法権のような独立国家が持つ権利には大幅な制限があり、将来の権利・義務の範囲がどのようになっていくのかが注目される。

写真１：スウェーデンの首都ストックホルムで開催中のサーミ議会（左上はサーミ旗）
出所：サーミ議会ホームページ
http://sametinget.dev.imcode.com/9690

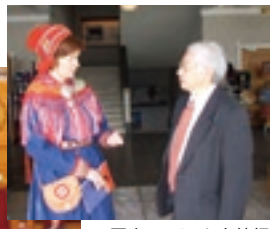


写真２：サーミ大統領（議会議長）と話す筆者（ノルウェー北部にて）

国際社会では、1994年のリレハンメル冬季五輪（ノルウェー）開催の機会等にもサーミ人の将来の国連加盟の可能性までが話題にされたことがある。仮に国際社会がサーミ人の民主主義的な準国家組織の国連加盟を承認するような日が到来すれば、これは定住領域国家と遊牧国家が共存できる初のケースとなる。

かつて、偉人が「人類の自然科学と技術は進歩しているのに、哲学（広義には人文科学）のほうは古代ギリシャ時代からほとんど進歩していない」と嘆いた。科学技術による戦闘手段の「効率化」でより効果的な大量殺戮が可能になる半面、それを防ぐための人文科学が遅れているため、戦争による被害のみが拡大していることを嘆いた言葉だとされる。しかし、もしもサーミ遊牧国家が複数の定住領域国家のサポートを得て共存するという国際社会の壮大なる実験が成功すれば、古来、生活手段の源泉たる領域的な権利を巡って争いの絶えなかった人類社会に大きな「人文科学」面での進歩が見られることになるかもしれない。

ただし、付け加えておかなければならないが、サーミ人の居住地域内でも民族的軋轢は絶えない。トナカイ飼いという職業面でも、居住領域や議会の扱いという側面でも、「サーミ人だけが優遇されている」と不満を抱く人々もいる。実際、ノルウェーの北部ではノルウェー語とサーミ語の二重言語表記となっている道路標識のサーミ語の部分が何者かによって銃撃された事件もある（写真３参照）。それでも、ノルウェーやスウェーデンがサーミ文化の発展に協力的なのは、これら各国がバイキングの子孫でもあり、広大な海上を自由移動する民族の子孫であることとも関係するのかもしれない。いずれにせよ、サーミ人の準国家の存在は、定住国家と遊牧国家の有史以来の対立に何らかの解決策を見出す新しい試み（実験）の一つとして注目される。

写真３：サーミ語表示部分が乱射された二重言語表示の道路標識（筆者撮影）

日本の周辺ではロシア、中国、韓国との「領土問題」が緊迫度を増している昨今、「新しい試みなどという理想論を言っている場合ではない」という意見もあるかもしれない。しかし、サーミ人とその周辺の３か国による壮大な実験が日本の隣国ロシアとも国境を接するスカンジナビア地域で現実的な対応として実施の最中である事実に注目したい。領土紛争は世界中の至るところで発生しており、既存秩序の崩壊危機の中で「ニュー・ノーマルの時代」とも呼ばれる情勢激変の続く中、サーミ人国家の「壮大なる実験」が、他の地域における衝突防止や紛争解決への突破口を提供する潜在的チャンスになるかもしれない。

ラップランドとサーミ族

- ラップランドとは、スカンジナビア半島北部、大半が北極圏に入り、ノルウェー、スウェーデン、フィンランド、ロシアの４か国領にまたがっている。ただし、「ラップ人」という呼称は差別用語として批判されている。
- 世界で真夜中の太陽を見ることができる地域であり、太陽が沈まない日が70日以上も続く。大部分がツンドラ気候帯に属し、住民よりもトナカイが多い地域もあるといわれている。
- この地の先住民であるサーミ族は、コルト（Kolt）と呼ばれ色彩豊かな民族衣装上着を身につけ、トナカイ飼育、漁労、狩猟など、自給的な生活をしてきたが、現在は定住生活とともに、鉄鉱山や水力の開発、森林資源の工業利用や農業の浸透で、トナカイ遊牧などの伝統的生活様式は変化を強いられているのが現状。